

[文献・資料解題]

上野行一『私の中の自由な美術』 光村図書 2011年

Watashi no naka no Jiyu na Bijutu, Independent Art in My Mind by Koichi Ueno

高橋 愛

Ai Takahashi

本書は、「対話型鑑賞」の有効性を学校教育の中へ取り入れようとしてきた上野が、近來の美術教育および鑑賞教育における問題を踏まえ、実際の活動を紹介しながら「美術鑑賞とは何か」を語ったものである。子どもたちの作品の見方と大人たちの作品の見方とでは、当然違いがあることは教育者ならずとも想像はつくだろう。しかし、何がどのように、何故違うのか、については現役の教員でも言葉にして説明できる者は少ない。そして、その違いを踏まえたところで、どのように「鑑賞」に結びつけていけば良いのかその手だてがわからないことが問題となっていた。

上野は、子どもと大人との違いの中でも「経験」に重点を絞り、鑑賞に結びつける方法を紹介している。まず、年齢によってそれぞれの見方があることを前提とし、「作品を見る経験」が必要だと述べている。一つの作品でもじっくりと向かい合って鑑賞する経験を子どもの時より行っていないければ、大人になった時でも観ているつもりで観ていない場合が多いことも指摘し、「美術がわからない」という大人たちが多いのは、観る経験をしていないことに起因しているのだろうとしている。また、子どもには経験がないからこそ、先入観ぬきで作品と出会える瞬間があり、知識的な経験がなくとも鑑賞の方法によって作品の核心に迫ることができる能力を持っていることの事例を挙げている。そして方法には、大きく二分した作品へのアプローチ方法があるとしている。

紹介されたアプローチ方法の実際例では、鑑賞者との対話が紹介され分析されている。取り上げられた作品には、古典的なものから近代、そして現代のものまである。実際に、この方法は脚光を浴び、学習指導要領の改定に伴って、光村図書から出版された新教科書では推奨されている。加えて、光村図書のホームページや教師用の指導書では、上野がまとめた対話型鑑賞のポイントが紹介されている。

従来紹介されてきた鑑賞に関する著書の中でも、この本は読みやすく理解しやすい。文中ではわかりにくい専門用語やカタカナ語は避けられ、実践例も会話と鑑賞した対象作品を記載し、その活動の中での鑑賞者の変化がどのようなであったかを誰にでもわかるように解説してあるからだ。従来の鑑賞方法の研究や紹介は、万人には専門的すぎるが故に理解しにくい側面があり、鑑賞教育はいつまでたっ



でも学校教育の中で否定されるか、一部の学校のみでの実践にとどまっていたきらいがある。

この状況を鑑賞教育の現在と照らし合わせてみよう。数年前より、美術教育では鑑賞教育が重視され、近年定着し始めている。学校現場に限定して言えば、平成20年改訂の学習指導要領を受け、制作中心的な授業はこれまで以上に鑑賞を取り入れた指導内容を重視する方向へ向かっている。また、美術館・博物館との連携がしやすくなり、これらの施設に児童・生徒を引率して行くことに加え、学芸員や教育普及担当者が逆に学校へ赴く出張授業などの実践も耳にするようになった。その一方で、依然として鑑賞の授業方法・指導方法を確立できない教員もいる。鑑賞教育自体が未定着である上に、上述のように専門家の説明が難しいことが授業・指導の確立を妨げている。

かつて岸田劉生は次のような言葉を残している。「(前略)感情美化の教育としての図画教育としては、鑑賞教育が最も根本的にある可きである(後略)」¹⁾。しかし鑑賞教育をできる教師がいなかったため「鑑賞教育方法等は、生徒の教育とともに先生も何等かの教育になる要素がある様に思ふ」²⁾。岸田は、画家でありながらも図画教育に多大な関心を示し、教育現場への提言をしている。岸田の文献は、山本鼎の提唱した『自由画教育』³⁾と合わせて読み解いていくのが最良であるが、大正期と同様の状況を未だに解決できていない我が国の鑑賞教育は、抜本的な見直しが必要であると感じる。つまり、教員自身が鑑賞に親しみ、鑑賞教育の指導法を自ら立ち上げていけるような環境づくりが必要である。

かの自由画教育運動が興った当時と現在とでは類似した側面がある。「子どもの個性」という概念が一般的に定着していなかった当時、山本はそれを極力簡単な言葉で説明していき、自由画教育運動へとつながっていった。誰にでもわかり得る内容だったからこそ、多くの人びとの支持を集めることができたのだ。この本も同様に、小学校教員を含めた美術教育専門外の教員にも学校教育における鑑賞教育の重要性を理解してもらえらるることのできるものであり、環境づくりの第一歩とも言える。

また、本書では造形の要素から感じたままを言葉にしていく「鑑賞教育」のあり方についても紹介されている。1998年、アメリカ・アレナスが来日し、「なぜ、これがアートなの？」というテーマとともに「対話型鑑賞」が流行したのを記憶しているだろうか。同題目の著書⁴⁾も出版され、知識に偏重しない鑑賞教育が主流となっていった象徴的な出来事となった。この流れを受け継いでいる。

「対話型鑑賞」は単に教師主体の作品解説にかわって、教師から発せられた質問による児童・生徒との簡単なやりとりではない。作品を取り上げるにあたって、教師はやはり作品について熟知し、児童・生徒の発達段階を理解し、実際対象となる学習者の心身発達を捉えていなければ、「学校における対話型鑑賞」は成立し得ない。いかにも当然のことのようであり、簡単に実践できそうな印象であるが、本書に挙げられた実践例を読み解くと、提示者(学芸員や教員)は巧みに作品の中へ参加者を導いていっていることがわかる。ひとりの発言から内容を膨らませたり、逆に焦点を絞ったり、あるいは探索させたりなどの行動を誘導している。提示者の事前努力が要されることがわかる。「自由に鑑賞する」とは、提示者の努力があって成り立つようなものでもある。その努力が、子どもの鑑賞経験となり、大人になってから「自由に鑑賞する」ことへつながっていくのであろう。

学校教育の鑑賞に焦点をあてた本書ではあるが、加えて、大学生にも勧めたい一冊である。特に本大学芸術学部に入学者の中には、美術館に行かない者、また大学で美術を専門とするにあたって行ってみただけでも楽しめず、それ以降は出向かない者もある。専門知識は必要ではあるが、このような学生にはまずは作品を楽しむ、その方法を知るという視点から本書に目を通して良い。

しかし、本書は「how to本」ではない。鑑賞そのものには正解なる鑑賞方法はなく、作品と向き合う時間は、提示された情報の意味を選択し真実を探っていく、自分自身の目で確かめていく、そういう時間になる。それは以前から言われ続けてきたことである。私たちは、真実の選択という問題をどのように自分で解決していけるのであろうか、他人から与えられたままの方法ではなく、それを活か

しながら自分自身で探ってこそ真なる「自由な鑑賞」となるのではないのだろうか。

最後に。当時学生だった筆者は、水戸芸術館にてアレナスのトーク・ギャラリーに参加し、さらに現代美術講座にも出席した覚えがある。今思い返せば美術教育では盲目的に「対話型鑑賞」に賛美を唱え、推進していったかのようにもあったが、現状を見ると、当時から何の進歩も見られない。そもそも「表現の自由と多様性」という概念そのものが現代のものである。それを前提に表現された作品にしか当時の「対話型鑑賞」は成り立たない。言い換えれば、決してすべての表現のすべてが自由ではないことを教師自身が認識しなければ、学校教育での鑑賞教育は行き詰まりから脱却できないであろう。なぜなら、鑑賞にはやはり「知識という経験」が必要だからである。大正期に誤解が生じたように、本書を読むにあたって「自由」という意味を取り違えないで欲しい。

注

- 1) 岸田劉生『図画教育論』改造社、1925年、35頁。
- 2) 岸田、前掲、30～33頁。
- 3) 山本鼎『自由画教育』黎明書房、1972年復刻版。
- 4) アメリア・アレナス（訳：福のり子）『なぜ、これがアートなの？』淡光社、1998年。